

## 毎年200人を超える新規認定者 分野別では「がん看護」が4割

CNS制度開始から20年が経過した。14年1月現在の認定者数は1266人。13年の認定審査では、申請者287人に対して、1次審査合格者は279人、2次審査は278人が受験、合格者は228人。1996年に第1期のCNSが誕生してから11年後に総数240人になったことから比べると、最近の3年間では毎

年200人を超える新規認定者が誕生している。

1266人のCNSの都道府県別状況は<図表2>の通りで、分野別では「がん看護」が4割の514人と圧倒的に多い。その背景には、06年のがん対策基本法とそれに基づき策定されたがん対策推進基本計画、文部科学省の「がんプロ

フェッショナル養成プラン」がある。

こうしたCNSの職能団体が「日本専門看護師協議会」だ。その代表である宇佐美しおり氏（国立大学法人熊本大学大学院生命科学研究部精神看護学教授、精神看護専門看護師）に同協議会の役割とCNSの現状を聞いた。

### インタビュー

## 協議会から学会へ 組織的に研究し、エビデンスをもった発言を目指す

日本専門看護師協議会 代表 宇佐美しおり氏

### ——日本専門看護師協議会とは？

「日本看護協会の認定を受けて活動を行っているCNSによって構成されています。CNS自らの高度実践の質保証や活動の場の拡大に取り組み、看護の質の向上を図るとともに、国民の健康の維持・増進のための政策提言を行い、その実践に向けて活動することを目的としています。1996年にがん看護と精神看護で第1期の登録者が誕生、分野の拡大とともにCNSは増えました。しかし、個々の活動では限界があります。CNSが力を結集して高度看護を実践し、エビデンスを持ったものとなれば、政策につながります。そう考えていた数人のCNSが発起人になって2007年協議会を立ち上げました。現場で1人きりで活動しなければならぬCNSにとって、情報の共有とネットワークも必要でした」

### ——協議会の主な活動は？

「目的を実現するために、①CNSの実践能力の強化②CNSの活用促進③CNSの施策④CNSの役割開発・評価⑤関係学術団体との連絡・連携⑥学術集会の開催⑦学会誌の発行—の各事業を行っています。そのために、臨床能力向上、専門看護師活用促進、研究成果提言、編集の各委員会を設け、活動しています。特にCNSの卒業教育の不足が問題となっていましたので、臨床能力向上委員会を中心に、分野ごとのスキルアップセミナーを開催、事例検討なども行いながら、実践能力の向上と改善に努めています。

また、キャリア育成のためのスキルアップセミナーも年数回開催、キャリア育成に向けた能力開発の研修企画案を検討したり、キャリアラダーの洗練化を行っています」

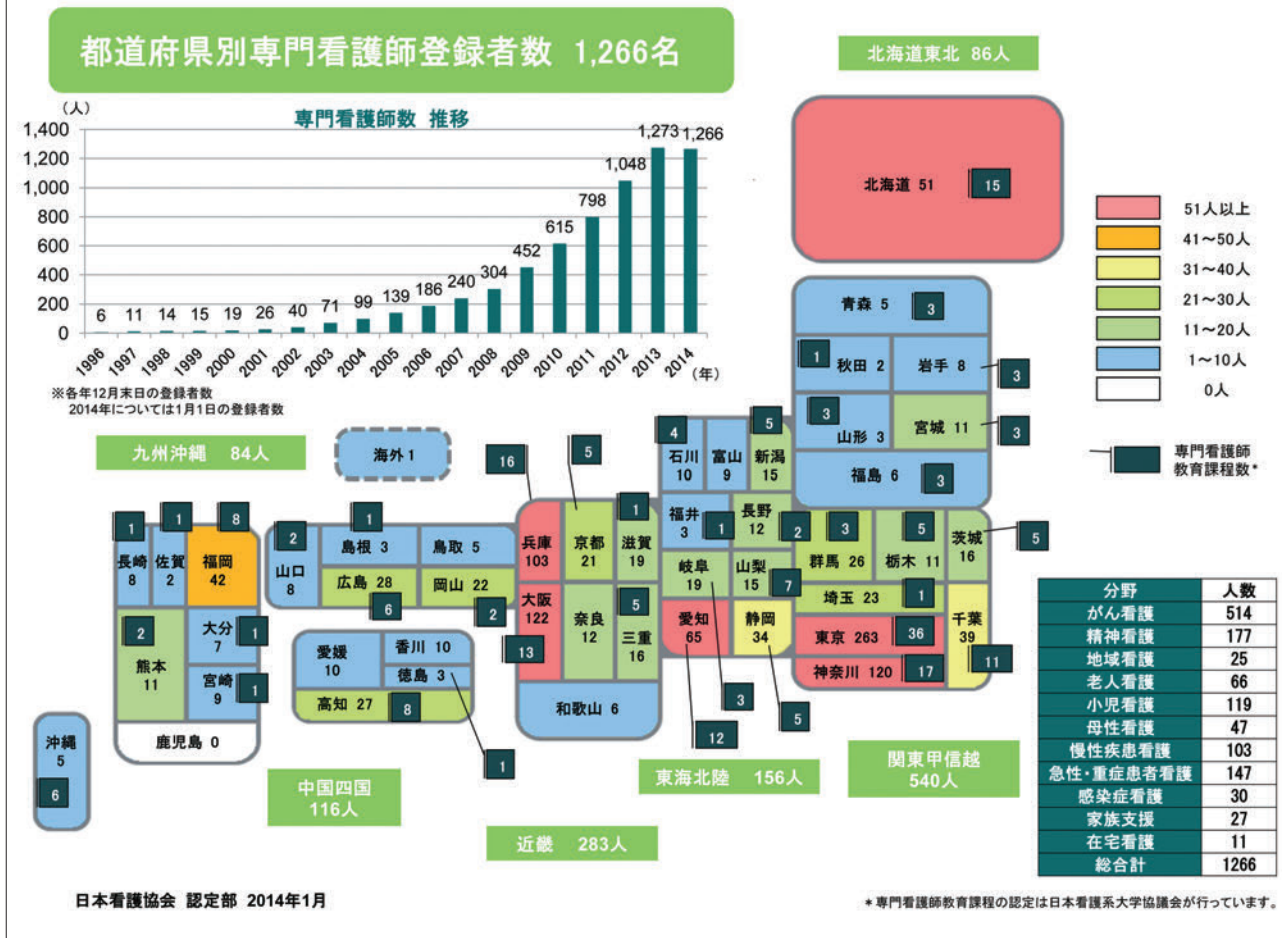


### ——協議会会員も増えています。

「現在、会員及び賛助会員は約1000人。CNS総数1266人の78.9%を占めるまでになりました。さらに組織力はアップしたい。一方で、専門看護師はまだ少数派であり、その活動は国民、医師や他職種から見えにくく、十分な理解を得ているとは言い難い状況が続いています。もっと現場でCNSを使ってほしい。それは、国民の医療ニーズを満ち、患者の病状や日常生活・社会的機能を改善し、患者・家族のQOLをも改善に寄与することに違いありません。CNS自身も現場で使っていただけるよう求めていかなければならないと感じています」

図表2 CNSの現状

(出典：日本看護協会ホームページ)



—このほど第1回日本CNS看護学会を開きました。

「職能団体の協議会には、メリットがないと加入しないCNSもいます。また、診療報酬や厚生労働省の審議会などで高度実践看護が議論されても、職能団体の意見はなかなか聞いていただけません。そこで、学会を立ち上げ、研究してエビデンスを作ることを組織的な活動としたいと考えました。例えば外来や地域をテーマにTransitional care（トランジショナル・ケア）を行った場合の再入院やQOLなどにおける成果のエビデンスをとる。それを持って社会的な発言をしていきたいと考えています。

『専門看護師の誕生から現在、

未来へ』を学会テーマとし、CNS資格認定制度を創設した日本看護協会、養成している大学院教育、そしてCNSが活動する現場とCNS自身が、今後どうしていくかを一緒に考えたいと設定したテーマです。制度創設に携わり、教育者でもある高知県立大学学長の南裕子先生に、同様のテーマでご講演いただきました。『専門看護師の現在と今後—患者・家族の回復とQOL促進のために』と題したシンポジウム、11分野のスキルアップセミナー、82の一般演題発表を行いました。当初の参加予定数500人を大幅に上回る1044人の参加者があり、会場が狭く、参加された方にはご迷惑をおかけしました」

—今後、CNSはどうあるべきでしょうか。

「実践だけでなく、エビデンスを示せるような看護研究をしてほしい。CNS個々の研究を、日本CNS看護学会が1つにまとめ、学術団体として提言、政策や報酬に反映されるよう活動していきます。また、海外の効果の高いケア方法などを研究し、わが国に反映する。そのためには分野ごとでもよいので、国際研究が必要です。そして大学院教育の充実。相互のカリキュラムを密にし、実践と研究を行う。アセスメントをして、スーパービジョンを示し、直接ケアを高める。CNSがフィードバックを受けることができるシステムにしてほしいですね」